2021　夏の終わりに

「監督たちの思い」

長崎県高等学校野球連盟　顧問会

も　く　じ

			頁
・はじめに	長崎県高等学校野球連盟　顧問　千綿　勝彦	……	1
・瓊　浦高校	監督　宮﨑　慎太郎	……	2
・五　島高校	監督　笠原　　優	……	3
・五島海陽高校	監督　吉田　賢太	……	4
・長崎南山高校	監督　布志木　信晴	……	5
・長崎東高校	監督　山口　一守	……	6
・長崎北陽台高校	監督　山口　貴明	……	7
・対馬高校	監督　土谷　一史	……	8
・上対馬高校	部長　末永　翔太	……	9
・壱岐高校	監督　坂本　　徹	……	10
・壱岐商業高校	部長　川瀬　康裕	……	11
・佐世保北高校	監督　田中　輝一	……	12
・佐世保商業高校	監督　田中　利治	……	13
・佐世保西高校	監督　萩原　広太	……	14
・佐世保南高校	部長　小森　修一	……	15
・清峰高校	監督　入江　文和	……	16
・平戸高校	監督　松郵　保久	……	17
・諫早高校	監督　田中　秀和	……	18
・諫早農業高校	監督　宮原　寛爾	……	19
・川棚高校	監督　本田　総一郎	……	20
・国見高校	監督　後藤　　修	……	21
・口加高校	部長　片山　泰成	……	22
・島原中央高校	監督　李　　崇史	……	23
・島原農業高校	監督　皆良田　一輝	……	24
・島原翔南高校	監督　尾嶋　智広	……	25
・創成館高校	監督　稙田　龍生	……	26
―――　付　録　―――			
「マネージャーの思い」			
・瓊浦高校	マネージャー　手塚　月菜	……	27
・五島高校	マネージャー　松本　桃花	……	28
・五島海陽高校	マネージャー　竹下　ソラン	……	29
・佐世保南高校	マネージャー　塩田　莉菜	……	30
・創成館高校	マネージャー　西山　明李	……	31
・島原高校	マネージャー　森松　小桃	……	32
・高校野球アンケート		……	33～40
・あとがき	長崎県高等学校野球連盟　顧問　北島　弘道	……	41

はじめに

今年も、高校球児にとって暑い、熱い夏の大会がコロナ禍の中、開催されました。
野球は筋書きのないドラマ、まして高校野球は歓喜、笑顔、悔しさ、涙が交錯する青春のドラマともいえます。

「甲子園」という聖地に夢や憧れを抱き、高校のスポーツでは人気のある部活動の一つです。しかし、その部活動も学校によっては大きな違いがあります。

甲子園を目指せる強豪校もあれば、部員不足により大会出場に四苦八苦している学校もあるのが現状です。

メディアにも大きく取り上げられ、スター選手も生み出す甲子園を舞台にした高校野球は「異常だ」といわれることもまた現実です。

「高校野球は教育の一環」「勝つ事のみが高校野球にあらず」「フェアプレー」「敬愛の精神」などなど細かい精神面の指導が求められています。

そんな高校野球に部活動の顧問として指導に携わる方々は、日々の練習（練習試合も含む）や各大会において、どんな思いを持ち、どんな言葉をかけ、どんな指導をされているのでしょう。とくに、三年生最後の夏の大会、甲子園への最後の大会へ向けては、さまざまな選手に対する思い（苦労や配慮）、があったことでしょう。

そんな指導者の思いや、言葉を、メディアはほとんど取り上げず、高校野球関係者も知る事はありませんでした。

そこで今回、この指導者の思いを伝えるべく、「２０２１夏の終わりに『監督たちの思い』」を編集いたしました。

この冊子が多くの人たちに読まれ、その思いが「伝わる」「知る」「学ぶ」そして高校野球の良さを伝える一助になれば幸いです。

令和３年１０月

長崎県高等学校野球連盟　顧問　千綿　勝彦

第103回全国高等学校野球選手権長崎大会開会式

開会式進行担当
長崎北陽台高校
田中 春帆さん
中村 琴奈さん

国歌　独唱
活水高校 田川　美桜さん

大会歌　独唱
島原高校 前田　莉緒さん

瓊浦高校　　監督　　宮﨑　慎太郎

私は、現三年生が入学すると同時に母校へお世話になった。何とかしてこの子達と甲子園へと思い、付き合ってきた。

今年の１月から安野監督より監督を引き継がせてもらった。前監督からの交代は、責任重大でプレッシャーを感じている。

夏の大会を迎えるにあたり、選手達には瓊浦高校の伝統、「全力疾走」と「大きな声」は徹底しようと常日頃から伝えていた。また、生活の全てがプレーに現れるからしっかりとやっていこうと話した。

今年のチームは、守りからリズムを作り３点差以内のゲームに持ち込むことが理想だったので、投手力、守備力を徹底して鍛えた。その結果は、夏の大会前、徐々に発揮されてきた。しかし、選手達が自信を持ってプレーしている様には見えなかった。

それはなぜか。私は、夏の大会２回戦で敗退して考えた。それは「考える力」を身に付けさせる事が出来ていなかったと反省した。選手が自分達の持っている力を１００％発揮できずに高校野球を終えてしまう姿に本当に申し訳ない気持ちで一杯だ。

高校野球を指導して約１０年が経とうとしているが、年々選手に対する指導が難しくなり、悩まされることが多くなってきている。もう一度伝統ある瓊浦高校を九州大会、甲子園に出場させたい。

五島高校　　監督　　笠原　優

今年は高校野球の指導に携わらせていただいて５年目、監督をさせていただいて１年目の年でした。初めて夏の大会を監督として迎えるにあたり、生徒たちに「主体性」と「成功への方法」を考えさせることの大切さを指導してきました。自分自身の高校野球の反省を踏まえていますが、「その環境にいれば」、「言われたようにやっておけば」と思考を放棄している生徒がいるように思います。昨年度、現諫早農業高校の谷口亨先生と指導を共にさせていただき、子どもたち自身に思考停止の現状を認識させ、打開するように手立てを講じる必要があることを学ばせていただきました。そのような指導で育ってきた生徒たちは、彼ら自身も驚くほどの力を発揮できるということを目の当たりにしました。

現在新チームとしての活動を開始し、その「主体性」を持たせることをテーマにチーム作りをしています。日々生徒とのやり取りの中で思うようにいかないことの連続ですが、今後も高校野球に携わることのできる幸せを噛みしめながら、指導に当たっていきたいと思います。

五島海陽高校　　監督　　吉田　賢太

私が高校球児だった頃、ヒットを打つことや勝つことが何よりの喜びだった。もちろん勝つことがすべてだとは思っていなかったが、それだけ強い思いで取り組んできた。その分、打てなかった時や負けた時は非常に悔しかった。どれだけ時代が変わっても「エラーしてもいいや、負けてもいいや」と思いながら練習する球児はいないだろう。指導者となり、どうすれば生徒達が上達するのか、どうすれば試合に勝つことができるのか、そればかり考えて指導してきた。

練習試合では、他校の先生方に指導方法・考え方を伺ったり、他県の強豪校と呼ばれる高校で監督をされている方の本を買って読んだり、とにかく知識を身に付けた。私自身、どれだけ野球について無知だったか思い知らされ、もっともっと学び続けなければならないと反省した。野球の奥深さも学んだつもりだった。チームも実力が付いてきたと思っていたが、今年の夏も勝つことはできなかった。

夏が終わり、どうすれば試合で勝てるようになるのか改めて考えた結果、やはり最後は「人間力」だと思うようになった。今までの試合を振り返っても、悪い意味で私生活が試合に出ている生徒がいたり、試合になると本来の力が出せない精神的に弱い生徒もいたりした。スポーツはメンタルの部分が勝敗を大きく左右する。指導者は技術指導だけでなく、緊張した場面で本来の力を出せるような心の指導をしていかなければならない。必要なのは「技術」以上に「心」なのだと改めて痛感した。

運よく高校野球に携わることができるようになって２年半。まだまだ知識も経験も浅いが、だからこそ生徒と一緒に成長することができる。また、私自身の人間力を磨くこともできる。これからも「勝てる」チームを作るために、「人間力」のあるチーム作りをしていきたい。

長崎南山高校　　監督　　布志木　信晴

新人戦、決勝トーナメントにおいて、ある強豪校にコールドで敗れた数日後、「相手に対して、戦う前から恐れていた。」という話が耳に入ってきた。つまり、戦う前から、「相手は強い」、「自分たちは弱い」という単純な意識である。弱いから、弱者として立ち向かおうでもなく、単に戦う前から負けている状態である。それが、このチームの始まりであった。

秋の大会は善戦するものの、最後はエラーで敗れた。そこからの歩みも決して順調とは言えなかった。九州大会優勝の大崎高校を横目に、自分たちの弱い心から抜け出すことができずにいた。日常生活や清掃活動・練習姿勢において注意を受けることも度々あり、苦しい日々が続いた。そんな中でも、このチームの二名の主将である鹿山・前田の存在がチームを変えていった。元々優れたリーダーシップを持っている二人であったが、新チーム当初は自分たちの力量のなさに囚われて上手く発揮できずにいた。それが、秋季大会後に行った他県チームの練習見学や厳しいトレーニングを経験する中で、両主将は成長していった。その成長とともに、チームも少しずつ前に進みながら長い冬を越えた。

期待を持って迎えた春季大会。またも早々に強豪校に跳ね返されることとなった。打てない、守れないという厳しい内容であり、冬の成長を期待した人々にとっては残念な感想を持ったことだろう。私も当然悔しくもあり、落胆もあったが、一つだけ肌身に感じたことがあった。それは、『ベンチ内が苛烈である。』『ベンチ内が沸騰している。』表現が上手くないが、今までに感じたことのない空気がこのチームにはあるということ。息をするのも苦しくなるくらいの勝とうとする姿勢に苛烈さがある。１回から９回までそれが寸断なく続く。そんなチームに成長していた。

春季大会が終了し、両主将と相談して、レギュラーとその他のメンバーのラインを明確に保ち続けることとした。練習量が圧倒的に少ないことを補うことと、レギュラーとしての責任感を磨くことを目的とした。遠征試合に行ってもポジション一人でシートノックを行い、二試合通してレギュラーで戦った。もちろん入れ替えも行っていった。チームは急速に負けないチームに変化していった。ＮＨＫ杯前は、ほとんど負けることがなくなっていた。両主将も力量が上がり、チームに対する言葉も、より高度で厳しい内容で、要求ができるようになっていった。そして、どんな強豪校に対しても、臆することなく戦えるチームに成長した。それが、指導者として最も嬉しいことであった。弱虫だった彼らが、男らしく強く立ち向かう姿を誇らしく思った。ＮＨＫ杯県大会では、ベスト４に入ることができた。

夏は調整が難しく、波に乗せることができず、監督として力量不足であり、生徒たちには申し訳なかったと思っている。勝つことによって、みんなで喜びたかった。ただこの一年、自分たちの変化を感じられる一年であったと思う。その成長の陰には努力が必要ということと、日々の積み重ねがもたらす変化という存在を知ることができた、一年であったと思う。夏の試合で敗れたものの一生の宝物を得たのではなかろうか。南山野球部創部以来、語り継がれる『大敵恐れず・小敵侮らず』の精神を体得した一年であった。

長崎東高校　　監督　　山口　一守

私は、生まれてから小学校低学年まで、病気ばかりしている体が弱い子どもでした。その頃の記憶は、病院に行っていることや、高熱を出して家で寝ているものが多いです。そんな状況を変えてくれたのが、野球との出会いでした。小学３年生から始めた野球のおかげで、体が強くなり病気をしなくなりました。

当時は、きつい練習に行くのが嫌な気持ちもありましたが、上達していく楽しさ、勝った時の喜び、負けた時の悔しさ、上手くいかない時の歯がゆさなどたくさんの感情を抱き、経験をさせてもらいました。

野球に恩返しをしたい。スポーツの素晴らしさを伝えたい。それが、私の支えになっています。そして、甲子園の土を踏むという目標が、日々の原動力です。なかなか試合に勝てない日々が続いていますが、それでも野球部の生徒は一生懸命、高校野球に向き合ってくれています。

今年の３年生も、日々学習と部活動の両立を果たし、目標を達成するため毎日を必死に生活してくれました。保護者の方や学校やＯＢの方などたくさんの人に支えてもらいました。感謝の気持ちでいっぱいです。監督として、どうあるべきか日々、自問自答しながら新チームへと、これまでの歴史を繋いでいきます。

長崎北陽台高校　　監督　　山口　貴明

昨年のことになりますが、新型コロナウイルスの蔓延は学校現場にも大きな影響を与えました。部活動においても活動禁止や自粛といった措置が取られました。野球も軒並み大きな大会が中止となり、ついには夏の選手権県大会も中止が決定しました。

しかし、高校野球に携わる先生方が中心となり、何とか３年生に高校野球を全うさせたいという思いから、県の独自大会を開くことができました。大人（指導者）が子どもたちのために奔走する姿には、本当に頭が下がる思いでした。同時に、独自大会に向けて練習に励む子どもたちの姿を見て再認識したことは、「やっぱり野球は子どもたちのものなのだ」ということでした。長い間高校野球の指導に携わる中で、嬉しいことも、嫌になることもたくさん経験してきました。そうした中で、いつの間にか自分主体で野球を見ていたのではないか、子供たちのことをしっかりと考えて指導していたのかということを考えさせられました。子どもたちは好きで野球を頑張っている、「主役は生徒」ということを忘れて自己中心的になっていたのではないかと。

独自大会は残念ながら一回戦敗退となり、子どもたちにはいい思いをさせてあげることはできませんでしたが、彼らはこの大会を通して多くのことを学び、経験することができたと思います。たぶんそれは今は分からなくても、子どもたちが大人になった時に気づくのかもしれません。でも、それでいいのではないか、それが部活動の意義なのではないかと思います。

今年は数年ぶりに監督に復帰し、試行錯誤を繰り返す中での大会でした。３年生を中心に戦いましたが、力及ばず二回戦敗退でした。子どもたちの力を出し切らせることを念頭に指導してきたつもりですが、チーム作りの難しさ、まだまだ自分が未熟であることを痛感させられました。これからは子どもたちの野球を大切にし、野球を通して人間育成をすること、そして今一度、自分の信念・思いはどういうものであったのかを探りつつ、私自身も成長していければと考えています。

対馬高校　　監督　　土谷　一史

夏の大会を迎えるにあたり、夏の大会の厳しさ、自分の可能性の大きさ、感謝する心の偉大さを生徒たちには説いてきました。生徒たちは今年の４月から赴任してきた私によくついてきてくれたと感じています。

夏の大会を通じて最も感じたことは、野球の技術を上げる指導と、勝てるチームを作る指導は、必ずしも同じではないということです。

高校野球には坊主頭、厳しい規律、大きな声での挨拶や返事など、古くから良いとされてきた伝統があります。そのような伝統は素晴らしいものであり、高校野球の価値を高めてきたことは間違いありません。しかし同時に、野球を嫌いになったり、思考をしない生徒が増えたりとジレンマも生まれていると感じています。

私はそのジレンマを感じ、古くからの伝統をおざなりにした指導を行いました。しかしその結果、夏の大会では生徒たちにかえって野球に対する嫌な思いを植え付ける結果となってしまったのではないかと思っています。そして、これは私の失敗であったと反省しています。生徒の能力を伸ばす指導と、チームとして勝たせるための指導、この二つの視点を持ち合わせた指導を新チームでは行っていきたいと思います。

上対馬高校　　部長　　末永　翔太

私は、野球を通して多くのことを学んで欲しいと思い、指導を行ってきました。その中でも、挨拶や礼儀作法の大切さ、感謝の心を忘れないことは重ねて指導してきました。将来、社会に出たときに、野球部で学んだことを生かして頑張って欲しいというのが私の中にあったからです。

今回の大会には猶興館高校さん、平戸高校さんとの合同チームで出場させていただきました。両校の生徒達、先生方との出会いは本校の生徒たちにとって貴重なものでした。野球に取り組む姿勢や挨拶、礼儀などを見直すよい機会ともなりました。今、自分たちにできることは何か、そして何を求められているのか。試合に出られないときでもサポート役として働くことの大切さを学ぶこともできました。両校の生徒達や先生方には本当に感謝しています。

３年生は最後の大会に向けて努力を重ねてきました。結果が出ずに悩んだり、苦しんでいたりする姿を見てきました。そのため最後の大会には強い気持ちで臨んで欲しいと思っていました。彼らの努力が結果に結びついたときは、胸が熱くなりました。３年生には自分が努力を続けてきたことに自信をもって社会に出て行って欲しいと思います。

３年生が努力をしてきた姿を見た後輩たちが、今後奮起してくれることに期待しています。新チームとなり、一つでも多くの勝利を目指し、野球と出会えたことが一生の財産となるように、これからも指導を続けたいと思います。

壱岐高校　　監督　　坂本　徹

今年の壱岐高校野球部のテーマは、「怜聖のために！！～GEKOKUJYO～」

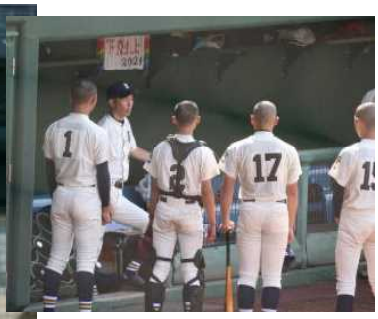
壱岐高校野球部の第１０３回全国高等学校野球選手権長崎大会は、選手・マネージャー・保護者・ＯＢ・ＯＧ・指導者・壱岐高校野球部を応援してくださる方々が一丸となり、戦った大会であった。

2020年、９月25日。新チームが発足し秋季大会に出場していたこの日。共に成長し、共に戦ってきた仲間が天国へ旅立った。突然の訃報に選手たちは泣き崩れ、平静を装うことも難しかったことを思い出す。大会期間中であり練習を行うも、活気ある普段の雰囲気とはかけ離れた状態であった。しかし、試合は待ってくれない。チームで話し合い、「甲子園」という志半ばで病に倒れた仲間のためにと選手たちは前へと歩き始めた。この時を振り返ると、選手たちは苦しみや葛藤、感情のコントロールで大変だったにも関わらず、全員が共通した想いを胸に、覚悟を決めた瞬間であったと感じる。

選手たちは、夏の選手権で「怜聖と一緒に甲子園へ」と冬場のオフシーズン、春季大会、ＮＨＫ杯、夏の選手権とそれぞれの節目で言葉を口にし、想いを共有し、怜聖に背中を押され、時には支えられ、戦い抜いた１年であった。特に３年生は悔いのない高校野球を過ごせたのではないだろうか。

指導者として、人として考えさせられ、成長させられた貴重な１年。前に進む勇気、チャレンジする勇気をくれたのは、一番辛い思いをしていたであろう選手たちであった。全員で立ち上がり、島の子たちが夏の選手権２年連続のベスト８！「ありがとう！！！」

最後に、辻村怜聖。あなたに出会えたこと、あなたと過ごした日々に心から感謝します。これまで、同級生や後輩を支えてくれてありがとう。勇気をくれてありがとう。そして、これからも、壱岐高校野球部を応援していてください。



壱岐商業高校　　部長　　川瀬　康裕

『変わっていくこと、変わらずにいること』

この春、壱岐商業高校に赴任した。勤務地としては８校目になる。その間に高校野球は変わってしまったのだろうか？選手も保護者も、我々指導する側も。公立学校では、生徒減に歯止めがきかず、合併チームも増えた。部員がいたとしてもベンチ入り20名を確保するのは難しい。

東京オリンピックで、日本野球は金メダルを獲得した。実に素晴らしい戦い方で、野球がチームスポーツであること、その土台に高校野球があることを実感させられた。だが、次回大会からオリンピック公式種目から野球が除外される。世界の動きとは別に、この国の高校野球は進化して来たと思っている。

そこには高校生の心身の鍛錬と育成を目指す教育の原点があるからではないだろうか。目の前の高校生と向き合う。心を掴む。熱き想いで闘う志をもつ。心を動かされる瞬間を共に作る。生徒へ愛情を注ぐ。これらは、私が目指している教師像なのかもしれない。時代の変化に対応しなければならない。我々指導者は変わらなければならない。そして、忘れずに変えてはならないものがあるのではないだろうか。これからも生徒と共に。高校野球の道を歩んでいきたい。

佐世保北高校　　監督　　田中　輝一

私自身、高校野球を経験しましたが、現役時代は夏の大会も１回戦負け、その他の大会も勝ち進んだ記憶は一切ないのですが、佐世保北高校に新規採用となり赴任しました。佐世保北高校は他校の先生方からも「強い」と言っていただける学校で、正直な話、戸惑いのほうが大きかったです。私以外に野球経験者がいないということや、私の出身校だということから、野球部の顧問となった次第です。

指導歴もなく未熟な私でしたが、佐世保北の職員や他校の先生方、保護者、何より生徒から多大なる配慮をもらいながら、なんとか今までこなすことができています。

夏の大会を終えて一言申し上げるとするならば、生徒に「お疲れ様」そして「ありがとう」。それ以外ないと思っています。

佐世保商業高校　　監督　　田中　利治

ここ最近の本校の全校生徒に占める男子生徒の割合は、２～３割程度ととても低く、野球部は毎年ぎりぎりの部員数で活動しています。今年のチームは、上級生が引退した７月の新チーム発足時、他の部活動から部員（いわゆる「助っ人」）を借りて大会に出場するなど苦労しました。「助っ人」を借りてチームを編成することは、私の高校野球人生の中で初めてのことで、当初はかなり戸惑いました。しかし、彼等は私に「野球が上手になりたい」と話してくれました。このような「助っ人」の情熱と部員たちの我慢強い指導により、野球初心者の「助っ人」たちは、着実に野球技術が向上していきました。

新入生が入部し部員数に余裕ができてもなお「助っ人」たちは週に数回、練習に参加しました。夏の大会は１回戦で敗退したものの、３人の「助っ人」のお陰で、好ゲームを展開することができました。「助っ人」たちの上達ぶりは目を見張るものがあり、彼等は初心者でも高校野球ができるのだということを証明してくれました。また、私は今回の経験で高校野球指導者として初心者を受け入れる勇気を持つことができました。そして何より指導の幅を広げることができました。

県内の野球部員数は減少し続けています。今後、この傾向はますます顕著になると思われます。このような状況で、我々高校野球の指導者はどのような心構えで、どのようなチーム運営を心掛けるのが良いのでしょうか。明確な答えはないとは思いますが、高校野球の裾野を広げるためには初心者を含めた多様な生徒を受け入れる寛容さを持つこと、様々なレベルの選手への指導の引き出しを持つこと、さらには選手個々が主体となって野球に取り組める環境を作ることなどが必要だと私は感じました。

多様な価値観が受け入れられる現代社会にあって、高校野球の指導者も新しい価値観を取り入れる柔軟性が必要ではないかと考えています。

佐世保西高校　　監督　　萩原　広太

昨年の４月、新入部員が０名、２年生５名、マネージャー１名、そういう状況の中、チームはスタートした。日々の練習もままならず、同じような練習メニューの繰り返し。実践練習は週末、他校に出向き、合同練習会に参加させてもらうなどで補った。試合も他校との合同チーム。新人戦も４校合同で出場した。試合中は顧問である私と、部長の２人はベンチ外からの応援。声をかけたい場面であっても、じっと見つめることしかできないもどかしさもあった。しかし、慣れない中でも他校の選手とともにプレーする姿は、純粋に野球が好きだというものが伝わってきた。試合には負けてしまったが、合同チームで出場してくれた３校の選手、関係者の方々には心から感謝している。試合後のミーティングでは、本校の選手からも同様な言葉が多かった。

本校の規定で、新チームの単独チームで公式戦に出場できない場合は、部活動の統廃合の対象となる。ということがあり、何としてでも３月に行われる九州大会予選に部員を確保する必要があった。当時の心情は本人たちにしか分からないが、先行きが不透明であり、不安な中で、練習をしていたことは容易に推察できた。結果から言うと、新入部員が入部してくれることになり、なんとか単独出場が叶い、部活動の存続にも繋がった。年度が替わり、新入生も５名入部し、今回の夏の大会も単独チームで出場することができた。今年も試合で勝つことはできなかったが、年間を通してのベスト試合だと思っている。３年生たちはプレーだけでなく、行動や声でチームを牽引してくれた。このことは必ず後輩たちに伝わっていることと信じている。

最後のミーティングでは、３年生全員が、野球を続けることができたことと、支えてくれた保護者の方々や、後輩たち、そして我々顧問にも感謝の気持ちを述べた。野球を通して一回りも二回りも成長してくれた３年生は、今後の人生において試合の勝敗よりも大きなものを勝ち得たものと確信している。

３年生の諸君、本当にお疲れ様。私も３年生とともに野球ができたことを心から嬉しく思う。

佐世保南高校　　部長　　小森　修一

夏の大会の一勝を勝ち取ることが、今年もできなかった。自分自身が高校３年生の夏も一回戦で敗れ、そのときのチームメイトがもらした「あれだけ練習しても、勝てなかった」の一言が脳裏を離れず、今年もまた、高校野球で１勝することの大変さを感じた。

自身が指導者になって忘れられない夏の一勝がある。平成１９年の夏の１回戦、控えで出場機会には恵まれなかったものの地道に努力を重ねていた３年生の選手が、リードを許す厳しい展開の中で９回に打席に立ち、同点打を放った。そのヒットは、普段通りのしぶとく食らいついた打球で、土壇場でも自分らしさを発揮し、３年生の精神面の成長を感じる一打であった。その試合は延長戦で逆転勝利を収め、初戦ながら大泣きした。

それからも、何度も３年生が夏の大会での土壇場で勝負強さを発揮するシーンを見てきたので、今年の生徒にも、精神的にタフになってほしいと願い、指導してきた。

今年度の佐世保南は、公式戦の戦績が３勝４敗で夏の大会に挑んだ。前年度の公式戦は０勝３敗だったので、今年は比較的多くの試合を経験できていた。特に、NHK杯では、３年ぶりの県大会出場ができた。勝ち上がる経験ができたことは、大きな収穫であった。

中でも、一回戦の初回に１５点を得点できたことは、それまで培ってきた集中力が発揮されたシーンであった。それまで練習試合で対戦していただいた強豪校の選手たちが、何点とっても手を緩めず、全力でプレーする姿を何度も見てきた。本校の選手は、大敗の中で、全力で戦い続ける相手選手の姿から学び、それを自分たちが実践することができた。集中力がないとできないことであり、チームの大きな成長を感じさせられた試合であった。

しかしNHK杯の勢いが、夏の大会にはつながらず、チャンスはつくれたものの得点できず、勝負所で負けてしまった。初戦敗退となったが、試合の中で３年生が精神的に成長できたと感じさせられるシーンもいくつかあったが、最後まで弱さがでてしまったと思えるシーンもあり、反省点が多くあった。また、来年の夏の１勝に向けて、鍛えていきたい。

清峰高校　　監督　　入江　文和

毎年、夏の大会が始まると、私自身が選手として臨んだ高校３年生の夏の大会を思い出します。甲子園を目指せるレベルに届かないチーム力で、甲子園に出場したいと、純粋に思っていたあの夏を思い出します。今、思えば甲子園にたどり着けるだけの力はありませんでしたが、高校生の私は、諦めず可能性を信じていました。どんな状況でも、思い続けることができるのが高校生です。だからこそ、高校生には夢や目標を叶えられると信じてもらいたいですし、その無限の力があると思います。

私は部員不足の学校で、野球の指導経験があります。そこで、「人を大事にする」ということを学びました。人数がいない中でも、生徒が頑張れるように声をかけ、野球ノートに励ましの言葉を書き込み、気持ちを高めてやれるように工夫しました。選手が目の前にいるから、野球の指導ができることを改めて感じました。

技術が不足していても、人として足りない部分があると感じることがあっても、「人を大事にする」ということを心がけて指導しています。生徒たちには「人を大事にしなさい」ということを常に伝えています。野球の技量は関係ない、人と人との関わりを高校野球で学んでもらいたいと思っています。人は助け合いの中で生きています。私はこれからも、人として温かみのあるチームづくりを目指していきたいと考えています。

今年の清峰高校は、３年生が少なく、試合にもなかなか出場させてやることができませんでした。そんな状況でも、もがき苦しみながら、最後まで必死に取り組んでくれました。後輩たちに対しても、伝統を引き継ぎたいという強い思いを、後ろ姿で示してくれました。目に焼き付けたその姿は、清峰高校の伝統としてこれから下級生が引き継いでくれるものと信じています。このチームでの指導は私の宝として胸に刻まれています。この宝は、しっかりと未来の高校球児への指導に活かしていきます。

平戸高校　　監督　　松郵　保久

３年間の高校野球生活、大変お疲れ様でした。たくさん笑顔になりましたか？　たくさん悩みましたか？　たくさん喜びましたか？　たくさん涙を流しましたか？　たくさん意見をぶつけ合いましたか？　たくさん感謝しましたか？　たくさん感謝されましたか？思い返せば、いろいろなことがあったのではないでしょうか。

みなさんの３年間の活動は、監督や部長の先生方、コーチや先輩、保護者の方々など、多くの人に支えられたからこそできたのだと思います。心身の発達や技術の向上など、目に見える部分の成長ももちろんですが、生活そのものにプラスの変化が出ている人がほとんどだと、私は信じています。

これから自分の夢や目標に向かって歩んでいく上で、高校野球で学んだことが大いに役立つと思います。努力することの大切さ、協力することの大事さ、良好な人間関係の築き方、挨拶の重要性、他者へ感謝の気持ちを持つこと……などなど、挙げればキリがありません。どのチームの先生方も「野球が上手になること」「試合に勝つこと」だけではなく、みなさんの将来が豊かになるようにと思って指導してこられたはずです。その思いを十分に噛みしめてもらえる日が来ることを願っています。

諫早高校　　監督　　田中　秀和

今年度に入って監督となり、生徒にとってはこれまでとの指導の違いなどもあり、戸惑いの中でのスタートとなった。今年のチームには、残りの時間を自分たちがしてきた「自分たちで考える高校野球」を最後まで続けてほしいと願っていた。それに加えて、監督としての自分ができることは、４月から残りの３か月でどれだけ高校野球の本当の楽しさを伝えていけるかを考えた。日々の練習や練習試合では、野球の考え方や流れの大切さを伝えた。夏の大会では、生徒はよく戦ってくれたが、勝たせることができなかった。敗因はやはり相手ではなく、サインミスやバント失敗など自チームの失敗であった。それは練習試合から起きていたことであるが、それを修正し、徹底するまでの生徒との信頼関係を築くことができなかったことを反省している。そして、やはり人間力のある選手が“夏”は力を発揮することを改めて痛感した。技術を発揮するためには、“心”を育てなければならないと再認識した夏であった。今後のチームには、人としての成長の上に、野球があるということをこれからも伝えていきたい。

諫早農業高校　　監督　　宮原　寛爾

高校野球は、人生の縮図であり、筋書きのないドラマでもあります。高校野球の魅力は、高校生のひたむきさ、謙虚さ、一途に白球を追い続ける姿に、感銘、感動を憶えます。

高校野球を通じて多くの人との出逢いがあり、多くのことを学び、生活の礎になりました。そんなことを思いながらも早いもので、４０年の歳月が経過しました。

高校野球の指導にかかわった、若い頃、無理難題なことを選手に押しつけ、選手の立場も顧みず、過酷な練習を科し、これだけ練習してきたのだから、負けるはずがない、出来ないことはないと、半強制的に練習をさせ、辛い時期を過ごさせました。

今考えてみると、選手達には、野球の楽しさ、喜びを教えることよりも、辛い練習や苦しみに耐えることが、必ず人生の糧になると、強く思い、指導していました。選手達の気持ちも考えず、今は後悔しかありません。

監督としての駆け出しの頃、当時、職場で勤務した、体育科職員の部活動を拝見させてもらいました。目から鱗でした。体育館内には、活気があり、目標に向かって頑張っている生徒の姿と、教師と生徒の信頼関係を感じました。指導計画、指導方法、目標の持たせ方など、生徒への接し方を学びました。指導の転換を図った時期です。

選手の立場を理解し、心から愛情を持つことで、選手との信頼関係が生まれ、部活動に限らず、全てに繋がるものだと感じています。

高校野球は、教育の一環であります。人を育てる大事な責任があります。しかし、生徒を育成していくための準備には、相当な根気とパワーが必要だと感じます。

しかし、現実は、勝敗に左右され、勝たなければならないプレッシャーに潰され、結果に固執する指導が生じ、生徒との人間関係にひびが入ったのも事実です。勝つためには、人の何倍、何十倍の努力が必要です。しかし、結果に振り回される指導は、生徒の成長には繋がりません。

高校野球の現場には、乗り越えなければならない、障壁があります。家族の理解、公務との両立、地域、保護者、OB会の繋がりなど、視野を広げて対応していかなければなりません。

これからの指導者は、謙虚さ、視野の広さを持つことです。そして、勉強を積んで理屈で説明をしていくことも大切です。指導者としての根気と忍耐が試されます。また、部活動の中で顧問の役割を明示し、指導者が互いに尊重し合うことで、生徒の頑張りに繋がるものです。

高校生として、多感な時期だからこそ、人生のよき先輩として、生徒の心に寄り添い、励まし、時には叱り、生徒の成長に繋がることを期待します。高校野球で得た貴重な体験こそ、将来の大きな財産となり、困難な世の中を生きる力となるはずです。

川棚高校　　監督　　本田　総一郎

第103回全国高等学校野球選手権長崎大会も、長崎商業の優勝で幕を閉じた。今大会は、コロナ禍の中、長崎県高野連を始めたくさんの関係者の皆さまのお陰で、開催できたことを心より感謝申し上げます。

さて、今大会は本校野球部にとって『リベンジマッチ』であった。なぜ、『リベンジマッチ』なのか。それは、２年前の夏に２回戦で対戦した長崎東高校と、今大会の開幕戦で対戦することになっていたからだ。２年前の対戦では現３年生２名が出場し、その２名のミスもあって敗退してしまった。また、勝ち上がれば大崎高校との対戦。昨年の長崎県独自大会で、初戦に対戦し、敗退したチームであった。さらに、同じパートには創成館高校も入った。創成館高校には２年前の１年生大会で、大敗した。３年生にとっては、まさに『リベンジマッチ』であった。選手たちは、これまでの雪辱を果たそうと力の限り戦ってくれた。

開幕戦を戦えたことも貴重な体験であった。私にとっても開幕戦は初めての経験で、格別な雰囲気を感じた。例年と異なり、開会式が簡素化されたことで試合開始まで時間ができたため、部長と何度も意見交換をし、開会式終了後６０分の使い方を入念に話し合って本番に臨んだ。しかし、選手たちは指導者以上に落ち着いていた。３年生９名は、自分が強くなるため、チームが一つになるために時間の許す限り努力できる選手たちであった。自分の役割を自覚し、進んで行動し、試合前の大切な６０分を有意義なものにしてくれた。今大会は、こうした選手たちの働きが、成果として表れた大会であったと考える。

川棚高校で監督として、４回目の夏の大会。ゲームの最終決断は監督にある。しかし、これまで深く関わっていただいた部長との二人三脚である。自分一人では何もできないが、部長と深く関わり、自分の考えを聴いてもらい、アドバイスをいただけたことで、良き判断ができた。一つ一つの決断をチームのため、選手のために良いものにしなければならない。そのためには、たくさんの視点を持って、ベストの選択をしていかなければならないと実感することができた。最高の選手とスタッフに恵まれた大会であったと、改めて感じている。

国見高校　　監督　　後藤　　修

本校の部員数は３名、野球の原点であるキャッチボールはできますが、実践練習が充分にできない厳しい状況です。甲子園には程遠いチームですが、純粋に野球が好きな部員で、毎日一緒に白球を追っています。また少ない部員数ではありますが、他校との連合チームで大会に出場するなど、指導者として貴重な経験を積むことができています。そして近くの学校が合同練習を提案してくださるなど、周りから助けられながら高校野球を続けられています。本当に有り難いと思います。

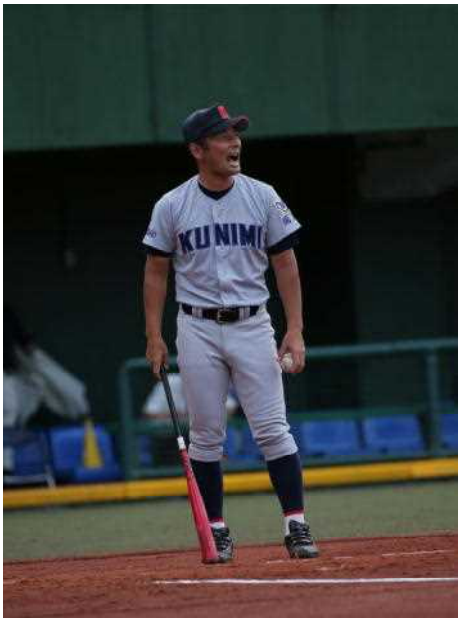
最近の部員は、非常に仲が良いですが、勝負に対しての厳しさや根性といった泥臭さが足りません。私は、高校野球はメンタルスポーツだと思っています。土壇場での勝負は、苦しい練習から這い上がった者にしか出せない気迫や闘志が左右すると信じています。また、ポジションや学年など、チーム内で互いに競い合うことで友情や犠牲心といった思いやりも芽生え、勝負強さへもつながるはずだと思います。

我々の仕事は、練習で努力をさせ、試合で勝たせることが一番の使命ですが、教え子たちが卒業後に主体的に社会貢献してくれるような人間性の育成にも尽力しないといけないと思います。将来、高校球児で良かったと感じさせたい。目標のために準備することや、諦めないことの大切さなど・・・

今の少ない部員数ならではの、きめ細かい指導もできると思います。部員の心身の成長に時間をかけて関わっていきたいと思います。

最後に、手前みそですが、私は、高校野球が大好きです。
他のスポーツが「不易流行」で変化してくのに対し、高校野球には古き良き習慣がまだたくさん残っているからです。挨拶や上下関係など「不易」であるべき部分を多く重視している点が好きです。「坊主頭」を貫いている学校にも共感します。

どこまで抗っていけるかわかりませんが、私もいけるところまでいきたいと思います。



口加高校　　部長　　片山　泰成

　本校野球部では、平成30年度から野球部ＯＢの穐山二雄監督が就任し、毎日熱心に指導に当たっています。仕事の都合上、部員たちと向き合う時間に制約があり、それを補うため部員向けに「監督つぶやきノート」を作り、メッセージを送り続けています。その「監督つぶやきノート」から監督の思いを抜粋してみました。

『努　力』

東京オリンピックをきめた池江璃花子選手　“努力は必ず報われる”

努力とは何か？　放課後の練習は努力と言えるのか？　毎日の学校での学習は努力と言えるのか？

努力とは、周りがやっていない時にいかに一人で練習して上のレベルに上がるか！

毎日続けなければ努力と言えない！毎日続けることによって自信が生まれてくる！

『練　習』

練習についての考え方

試合に負けたから、一生懸命練習をする。ミスをしたから、マジメに練習をする。

周りの人に感謝の気持ちをもって練習する。

これだけの考えだけでは上達しないし、試合に勝てない！

一番大事な「試合に勝つ」という気持ちがどれだけ大きいか？

『頑張りと成長』

人それぞれ、がんばり方がある。「本気で頑張る」ということ。

がんばっても、がんばっても、うまくいかないことがほとんど。

どうして、どうしたら、うまくいくか常に考える。

できる、できないではなく、考えることで成長につながる。

ほとんどのことがうまくいかない。

そこに成長するカギがあるのでは。

『チームワーク』

一人でできないことを集団で行う！

一人ひとりの力を合わせることで、大きな目標を達成する！

一人ひとり、力の差があるので、周りの人のできないことをカバーできるように心がける。

チームワークとは、組織における目標を皆で共有し、チームの目標に向かって日々の練習を行うことで、皆が同じ考え方で練習しているわけではない。意見の対立があるけど、対立しながら、意見が違っても相手を認めながら、理解しながらチームの目標に向かって行くことができれば・・・。

どうすれば、自分は集団のために役に立つか？　それを見つけるための練習。

野球を通して、集団での自分の生き方、周りの人とのかかわり方など

集団の目標のためにどうすべきか、学ぶ！

　「監督のつぶやきノート」に目を通した生徒たちは、日々刺激を受けながら成長しているものと思われます。

島原中央高校　　監督　　李　崇史

今年も夏の大会は初戦敗退となりました。これで四年連続です。四回も続くという事は偶然ではなく、僕のやり方が悪いからだという事です。今年に関しては、個の力が今までよりも劣るという事で、例年よりは個の力に頼るという事はしませんでした。それでも結果は同じ。僕には次があるけど、生徒たちに次はない。頑張ってきた生徒たちに申し訳ないです。

引退、卒業する時に島原中央を選んで良かったと親御さんや生徒たちに言ってもらえる時があります。でもその三年間があったからこそ、良かったのかどうかなんて、長い目で見ないと分かりません。10年経った時にあの学校に行って良かったなと、思っていただけるような指導ができれば、と思っています。

引退してこれから次のステップに移る生徒たちに願う事は、雰囲気、空気に流されない確固たる自分を持って生きてもらいたい、という事です。かつてボクシングのモハメドアリは戦争に反対し、徴兵を拒否した事でチャンピオンの座と、ボクシングライセンスを剥奪されたと聞きます。しかし何年かして世論や裁判所の判決が変わり、アリの主張が正しかったとなりました。世論がいつでも正しいわけではないという事です。99人が右に行っても、左が正しいと思えば左に行く。周りに流されずしっかりと日々自問自答して、自分が信じる道を進んでもらいたいと思っています。

島原農業高校　　監督　　皆良田　一輝

ここ数年、私たちの生活様式は急激に変わり、当たり前にそこにあったものが非現実なものとなりました。去年の暮れに見たＣＭの中に『見えないものと闘った１年は、見えないものに支えられた１年でした』というフレーズがありました。部活動をしていた人だからこそ、この時代に高校生活をしたからこそ、この【見えないけれど自分が支えられたもの】に気付けるのではないでしょうか。

私は小学生から野球を始め、全国大会にも出場できました。ただ、この時も、そして、中学で入った野球部も当時の顧問が素人だったこともあり、私の中で野球とは楽しい雰囲気の中、『友達』と遊ぶという幼いものでした。しかし、高校１年生になった私は、例え試合に出ずとも、チームのために何ができるのかを考え悩む３年生や、伝統とは何か、高校野球とは何かを熱心に教えてくださった２年生の姿に深い感銘と衝撃を受けました。特別な日々を共に過ごす野球部の同級生は自然と繋がりも強くなり、友達とは違う『仲間』と呼べる存在でした。３年間甲子園出場は叶わなかったのですが、社会人になった今でも、甲子園という目標に捧げた３年間と高校時代の野球部の仲間は特別なものです。

そのような日々を過ごせた経験があるからこそ、コロナ禍により、部活動を始め多くの日常を奪われてきた高校生たちの想いは計り知れません。しかし、積み重ねた日々と仲間がなくなるわけではありません。現代社会はＳＮＳやスマホの多様化により、人間関係の希薄さが問題となっています。これからの時代を生きていく高校球児達には、高校野球を通してできた仲間や恩師の存在、そして高校生活を支えてくれた保護者や地域の方々への感謝を胸に、これからの人生を歩んでほしいです。

島原翔南高校　　監督　　尾嶋　智広

本校の野球部は３年生１名、２年生２名、１年生１名の選手４名と、１年生３名のマネージャーの計７名で日々の活動に取り組んできました。少人数のため限られた練習しかできませんでしたが、その分一人一人に多くの練習時間を費やすことができたことと、国見高校、諫早商業高校と多くの合同練習の機会を設けていただいたことにより少しずつ選手の技術も向上していきました。

新しい年に入った頃、このチームとして何か一つでもどこにも負けないものを決めようと提案し、選手たち自身で考えてもらい、「挨拶、感謝、整理整頓」を徹底することになりました。このことを決めてからは、選手が何事にも前向きに取り組むようになったように感じました。特に唯一の３年生である主将の柳田修斗は、不器用ながら自ら率先して動くことで後輩のお手本となり、地域貢献活動などにも積極的に参加の意欲を示してくれました。そのおかげもあって、野球部は学校の先生方からも地域の方々からも応援していただけるようになりました。

夏の大会は人数が足りずに出場すらも危ぶまれましたが、他の部活動の支援をいただき、助っ人選手を７名借りて参加することができました。試合では敗れはしたものの、最後まで一生懸命にプレーする選手たちの姿はとても印象に残っています。この夏の大会のみならず、一年間様々な大会に出場するにあたって多方面からご支援とご協力をいただきました。この場を借りて改めて感謝申し上げます。

私はこの島原翔南高校に赴任してから野球部監督をさせていただき、初めて一年を通じて選手の成長をサポートすることができました。野球の技術は決して高いとは言えませんが、少しでも上達させようと努力する姿勢に野球の原点を感じました。この選手たちを指導できたことに感謝するとともに、ここで培った経験を忘れずにこれからの指導に生かしていきたいと思います。

創成館高校　　監督　　植田　龍生

高校野球の指導者になり13回目の夏が終わった！毎年思うことだが、勝たせてやりたい！勝ってほしい！
我が野球部では、「甲子園だけが全てと思って３年間やってくれ」と入部式で伝えて高校野球がスタートする。甲子園を目指してきている生徒に対して、いきなり甲子園だけが全てではないよとは言えない！

今年のチームは、監督生活13年の中でも、手応えのあったチームだった。しかし新チーム当初から全国で戦えるチームを目指してやってきたが、なかなか上手く歯車がかみ合わなかった。練習試合では勝てるが、本番では勝てない、力が発揮できない、しかしそれが本当の力じゃないかとミーティングで何度も話をした。勝てない焦りと勝たなくてはいけないプレッシャーとの戦い、特に最後の夏の戦いは、勝てなかったチームを象徴しているかのような戦いだったし、勝つことの難しさを改めて痛感させられた１年だった！

敵と戦うのは３年間の中のほんのわずかな時間だ、自分との戦いの方が長い、毎日の自分との戦いに勝ってこそ、相手に勝利することができるのだよとミーティングでよく話をする。

東京オリンピックが行われている中、改めて思うことがある。オリンピック競技約３０種目あるなかで、選手と監督が同じユニフォームを着て試合をするのが唯一野球だけであると言われている。確かにそうである。

メンバー決めから、ここぞという場面で、打つのか、待つのか、スクイズを外すのか等、一球一球監督の指示で動く。監督が重要な戦力である。特に高校野球では、監督力が試合の勝敗に直結するのは言うまでもない！

甲子園だけが全てと思って頑張ってきた三年生には、勝たせてやれなくて申し訳ない気持ちでいっぱいだ。この悔しさを次のステージで晴らし、人生の勝利者となってほしい。
引退した今だからこそ言える「甲子園だけが全てではないよ！」

付　録

『　マネージャーの思い　』

瓊浦高校　　マネージャー　　手塚　月菜

「甲子園出場」これは、私にとって小１から約１２年間、一度も変わることのなかった夢でした。野球部のマネージャーとして過ごした高校生活は、嬉しいことや達成感を味わうと共に、悔しい思いをしたり辛い経験もしました。しかし、「甲子園」という存在が私の活力となり、甲子園出場に向けて一生懸命練習する部員達の姿もまた、私の大きな原動力となりました。

家族よりも部員と過ごすことが多かったと感じたマネージャー生活でしたが、同学年１７人のおかげで、笑いの絶えない日々を過ごせました。ランメニューをお互い励まし合いながら乗り切ろうとしている姿から電停でおかしな話をしている姿、たくさんの場面を一緒に過ごせたことが何より幸せです。甲子園出場という夢は叶いませんでしたが、私の夢を１７人に託したことに後悔はありません。たくさんの思い出をありがとうと伝えたいです。

そして、安野前監督を含め指導者の先生方、先生方とマネージャー業だけでなく、野球の話もできました。私は高校に入るまで野球をしていたので、先生方と野球の話をするのが楽しかったし勉強にもなり、さらに野球が好きになりました。

瓊浦高校野球部で過ごした２年半は、私にとってかけがえのない時間でした。大好きな野球で出会った人との関わりを大切に、これからも頑張っていきます。

五島高校　　マネージャー　　松本　桃花

入部してから引退までの822日間、嬉しいこと、楽しいこと、辛いこと、悔しいこと、悩むことがたくさんありました。そしてどんなこともチーム全員で、乗り越えてきました。部員とは思ったことを言い合い、何度もすれ違うことがありました。私たちが上級生になった新人戦では、２試合とも５回コールド負け。部員には「引退まで１勝もできないかもしれない」と謝られたこともありました。この先どうなってしまうのかという不安もありましたが、部員同士の厳しい声かけや、切磋琢磨して練習に励む姿を見ていると、その不安はなくなりました。

夏の大会では９回に逆転したり、延長戦に持ち込んだりなど、今しか味わうことができない高校野球の面白さをチーム全員で楽しむ事ができました。こんなに最高の夏を経験できたのは、一生懸命練習に励んでくれた部員や技術面だけでなく、人間的な成長について指導してくださった先生方、いつも応援してくださる保護者さん、新型コロナウイルスの中で感染対策を徹底し、運営してくださった関係者のお陰です。

野球部のマネージャーとして過ごした822日で、たくさんの感動と勇気をもらい、更に高校野球を好きになりました。

五島海陽高校　　マネージャー　　竹下　ソラン

父がソフトボールチームの監督をしていて、男兄弟みんな野球をしていたこともあり、なんとなく野球は私にとって一番身近なスポーツでした。高校では野球部のマネージャーをしたいと思い、入部することを決めました。野球部のマネージャーは、私が思っていたより何倍も大変で、入部したころは全く気が利かず、部員のみんなに迷惑ばかりかけていました。特に物事を両立させることが苦手な私にとっては、部活時間も長く、休みもあまりない野球と勉強を両立させることがとても大変でした。そんな私が一人きりでマネージャーをすることになり、当時は何のためにマネージャーをしているのだろうと思う時も正直ありました。しかし、私が最後まで続けてこられたのは、失敗しても責めずに、雨の日も暑い日も泥だらけになりながら、全力で頑張っている部員を裏切られないと思う気持ちがあったからです。なかなか試合に勝てないこともありましたが、みんなのナイスプレーが見られる度に、試合中にみんなの笑顔が見られる度に、マネージャーをしていてよかったと思いました。みんなの頑張っている姿は、私にとっての励みでした。学校でも部活でも自分のことを支えてくれた四人の同級生と、素直で元気な八人の後輩部員、悩んでいる時に話を聞いてくださった吉田先生と吉原先生には感謝しています。私に、野球というスポーツの楽しさ、感動を教えて下さりありがとうございました。引退してもずっと海陽野球部を応援しています。

佐世保南高校　　マネージャー　　塩田　莉菜

私は、「悔いのないプレーをしてほしい」と願い、マネージャーとしてサポートをしてきました。

私たちの高校野球は、コロナウイルス感染拡大防止のために、学校が休校となり、練習試合や練習時間の制限が度々あったため、思い通りに野球ができないこともありました。しかし、その制限期間が長かったためか、試合ができる感謝の気持ちを強く持つことができたと思います。また、練習時間が制限される中、選手一人一人が限られた時間の中で、今日は何を目的とした練習なのかをしっかり考え、行動していたので、チームの団結力がより強くなったと思います。このような状況であるからこそ、私は思い切りプレーをし、悔いのない高校野球にしてほしいと思いました。

私は、一学年下のマネージャーの後輩がおらず、夏の大会後の一年間、一人で部員を支えてきました。「もう一人ほしい」と思うこともありました。しかし選手や保護者に手伝ってもらい楽しく仕事ができました。選手の練習時間を、私の手伝いに割いてもらうのは申し訳ないと思う反面、選手との会話が圧倒的に増えたので、それはとても嬉しかったです。　また、私が中学生時代にソフトボールをしていたことをみんなが知っていたので、選手から「ボール投げて！」と頼られることもありました。このようにお互いに助け合っていたからこそ、どこのチームよりも、選手とマネージャーの仲が良かったのだと思います。

最後に、これまで協力していただいた方々に感謝したいと思います。ありがとうございました。

創成館高校　　マネージャー　　西山　明李

私が、この三年間で、心の底から「ここに来て良かった」と思えたのは、最後の試合を終えた時でした。

私は、兄が創成館の野球部として三年間やり遂げた姿に憧れ、入学しました。しかし、新型コロナウイルスという見えない敵により、一歳上の先輩方の選抜大会、夏の選手権大会が中止となり、とても悔しい思いをしました。そして、いよいよ迎えた新チーム。大会が開催されることに改めて感謝の気持ちで溢れ、自分たちの時代だし、というワクワクした気持ちで過ごしていました。しかし、練習試合、公式試合ともになかなか結果が出ず、夏の前哨戦といわれるNHK杯ではまさかの初戦敗退という結果でした。その時、マネージャーである自分にも敗因があるのではないか？と考えたり、どこにも向けようのない悔しさで精神的に一杯一杯になり、選手とぶつかったこともありました。部員からは「つい言いすぎた。ごめん。ここに来て良かったと思える終わり方をしよう。最後までサポートよろしく。」と言うメッセージが届いたり、ミーティングを何度も何度も重ね、練習に励む選手たちの姿にたくさんの元気を貰いました。そして迎えた最後の夏、三回戦で大崎高校に敗退。まだまだみんなと一緒に頑張りたい、終わりたくないという思いから、現実を受け止める事ができませんでした。今思うと、最後の試合が一番ドキドキで、感動し、心の底から創成館の試合を楽しむ事ができました。

この三年間、様々な場面で悔しい思いをし、押しつぶされそうな時も沢山ありました。それでも、選手達が練習に励む姿を見て、元気を貰って踏ん張れました。マネージャーを出来るのは選手のみんながいるからです。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。そして、社会人として必要な基本を教えてくださった、監督を始めとする指導者の方々にも心から感謝しています。創成館に来て良かったです。

島原高校　　マネージャー　　森松　小桃

私が、野球部のマネージャーをしていて良かったと思う瞬間は、部員に「ありがとう」と感謝されるときでした。

高校へ入学して何の部活に入るか迷っていたところ、野球部員に声を掛けられ、見学に行きました。当時のマネージャーの先輩に説明してもらうと、「きついけど、やりがいがある」と言われ、３年間続けることで自分が成長できる部活がいいと思い、入部を決めました。

私は、部員が何をしてもらったら助かるだろうか、何をすれば練習がしやすくなるだろうかと考え、自分にできることを最大限するということを一番に心がけていました。そうすることで自分の周りをみる力もついたと思います。この３年間で、みんなと一緒に乗り越えてきたこと、きつかったこと、喜んだこと、全てが私の宝物になり、いい経験になりました。

野球を通じて３年間いろいろな人と関わり、多くのことを知り、たくさんの人に支えてもらいました。きついこともあったけど、それ以上に嬉しかったことや楽しかったことが多くあり、たくさんの人に感謝しています。

もしもう一度、高校生活を過ごすとしても、私は野球部のマネージャーになりたいです。

付　録　２０２１高校野球アンケート　集計結果

集計数　２４ 名

１　あなたの年代に丸印をつけて下さい。

40歳未満－１３名（54．2％）　40歳代－８名（33．3％）　50歳以上－３名（12．5％）

参　考

長崎県内高校野球指導者の年齢構成(2021(令和3)年度　監督･部長のみ)総数108名

なお部長とは責任教師のことです。

40歳未満－36.1％　40歳代－33．3％　50歳以上－30.6％

２　高校野球を高校時代経験しましたか？

〈 経験者 〉

どんな思い出がありますか。

（試合、練習、学んだことなどを書いて下さい。）

・　一生付き合っていく大切な仲間ができたことが最大の思い出になった。

・　試合に勝つことの難しさや嬉しさ、野球の楽しさや怖さ、人とのかかわり方や礼儀など多くのことを指導していただき、学ぶことができた。

・　私が学んだのは「正しい」努力の大切さです。ただがむしゃらに、行き当たりばったりで努力をしても、成果には結びつきづらいことを学びました。問題を精査して改善点を洗い出し、その問題点を改善するような解決方法だったり、努力を見つけたりしなければ、必ずしも望むような成果は得られないということです。

・　試合に勝てた時の喜び、負けた時の悔しさ、そして日々の厳しい練習です。

・　甲子園に出場し、人間の可能性の大きさ、感謝の心の偉大さを学んだ。

・　甲子園大会に出場でき、夢はかなったが、公私ともに悔いの残る多くの経験をした。そして指導者になりたいという進路の明確な目標が出来た。

・　努力は必要（見える努力・見えない努力）であること。試合など、実践を通してしか出ない課題があり、実践は成長する上で必要であると感じた。

・　技術的なことはもちろんですが、野球を通して準備の大切さを学びました。

・　思い通りに行かないことも多い人生で、きついこと、辛いことを我慢して乗り越えられる人としての基礎ができた。

・　周囲と力を合わせて目標に挑戦する素晴らしさを感じることができた。

・　もっとガツガツ指導して欲しかった。また、厳しさの中で高校野球を全うしたかった。

・　とにかく練習に耐えること。練習の思い出しかない。精神的な強さを得られた。

・　一球で流れが変わること、一球の重みを感じた。上下関係の厳しさや精神論は必要である。

・　私は進学校出身で、練習時間や練習場所に大きな制約がありました。それでも学校生活の中で部活動は一番の楽しみでした。高校野球は他のスポーツにない熱い物語があるように思えます。私が高校の教員を目指したのも高校野球に携わりたいと思ったからです。

〈未経験者〉　*当時，高校野球についてどんなことを感じていましたか？*

・　クラスに数人野球部員がいて、休み時間等にボールの補修（赤い糸で）をしていました。それを見て、道具を大切にする部活動なんだと思っていました。

3　高校野球の指導者になって，または野球部の顧問になってどう思っていますか？

・　好きなことを指導できる立場となり、幸せも感じます。

・　結果が出なかったり、思うような指導ができなかった時などは責任を感じ、苦しい思いをすることもあります。

・　厳しさの中にも、野球の楽しさや面白さに気づかせ、向上心を持ち続ける選手を多く育てたい。

・　自分が選手の時とは違い、試合に出ていないメンバーも含めて一つのチームであることが分かった。

・　自分自身が高校野球を終えるときに描いた将来の姿が現実となり、幸せを感じている。

・　高校野球で成長させてもらった人間として、野球に向き合う子供たちに、人生を切り開く力を身に付けてもらいたいと強く思っている。

・　きつい、辛いことを我慢して乗り越えること。人を思いやること。目配り・気配り・心配り。

・　指導者として、高校野球に携わることができ感謝しています。そして少しでも生徒たちの力になれるよう、自分自身も日々勉強しなければと感じています。

・　やりがいのある仕事であり、家族、関係者には多くの迷惑をかけたが、教え子や多くの方々との出会いや時間は自分の人生を間違いなく豊かで充実したものにしていただいた。

・　基本的な生活習慣（礼儀作法、気を利かせること）やチームワークの大切さ、努力を積み重ねることの大事さ、道具やグラウンドを大切にすることなど日常生活の重要性をより感じています。

・　野球を通じて、人との関わり方や目標達成への努力の大切さなど、人間として成長して欲しい。

・　現在の長崎県の多くの公立高校の野球人口が、大幅に減少していることがとても悲しいです。

４　高校野球をどのように指導してますか？（何を教えていますか）

・　野球がすべてではなく、高校生活あっての高校野球だという話は常にしている。授業や課題、委員会活動など、当たり前の学校生活を当たり前に取り組んだうえで、一生懸命に野球に取り組む、みんなから応援される野球部を目指して指導している。

・　「主体性」を持つことの大切さです。「自分が」状況を打開して、「自分たちで」難局を乗り切って行くといった自ら考えて動くことを大切にしています。また、それには時間はかかるので根気強くやっていくしかありません。

・　野球の楽しさ、やってきて良かったと思えるような経験をさせてあげたい。将来も何らかの形で野球に関わってくれたり、自分の子どもにも野球の楽しさを教えてあげられる親になってほしい。

・　野球から離れたときに自分にどのような魅力があるのか、自分の強みは何なのか。そのようなことを意識して高めていかないと幸せな人生を歩むことができなくなる。野球に取り組むことで、そのようなことも学び、高めることができる。

・　自分たちだけの大会ではない。保護者やOBの方々の思いも背負っていること。適度の緊張は逆に大切で、それを本番までに乗り越えること。

・　人生の歩き方（人としての根幹）。自分を鍛えなさい。（心と身体）　自分との勝負にこだわること。「強くなくては生きていけない。優しくなければ生きていく資格がない」「応援できる人」・「応援される人」になりなさい。

・　基本的な生活習慣（礼儀作法、気を利かせること）、チームワークの大切さ、努力を積み重ねること、道具やグラウンドを大切にすることなどを通して、本番で発揮するためには心の部分の成長が必要であると言い続けている。

・　プレーやチームとしての活動を指導する中で、相手に自分の気持ちを伝えることや、プレーの先にある目的やなりたい姿を実現するために、意思、意図をもって練習に臨むことを重視して指導している。

・　まず人間として信頼される人間になってほしいと願っています。そのためにも、生徒の将来を見据え、むしろ人格形成に力を入れることが重要だと考えます。

５　夏の大会は３年生にとって最後の大会になります。

Ａ　大会前，練習やミーティングでどのような指導をしていますか？

・　この一打席、この一球が最後になっても悔いが残らないように、全力でプレーをするようにという話をしている。自分が満足いくプレーが結果として、自分の持つ力を最大限発揮することにつながるのではないかと思っている。

・　様々な想いを胸に、自分たちらしい野球をする準備。体調管理の徹底。大会が開催されることに伴い、大会関係者の方々への感謝の思いを持つことを話している。

・　野球は仲間や相手がいないとできないので、チームメイトや相手校の選手を大切に思うことが大切だということ。

・　最後だからこそ、これまでやってきたことしか出せないし、自分自身のこれまでの取り組みの成果が表れる。どのような結果であれ、それを受け入れてこれからの人生に活かせばいい。うまくいかなくてもいい、もがき苦しむ姿をしっかりと後輩達に見せてもらいたい。

・　「勝敗の結果を追うのではなく、自分の努力・チームの努力・支えてくれた方々への感謝を１００％発揮する責任とやりがい」について話しています。

・　他の部からの手伝い部員も含めて、とにかく少しでも多くの時間を共に過ごさせることにより、仲間意識を持たせるよう心掛けました。

Ｂ　大会（試合）が終わってどんな思いを持っていますか？

・　指導者としてもっと自分にできることはなかったのか、他の指導者であればもっと良い結果があったのではないか、もっと色々なことを生徒に伝えることができたのではないかということを考える。

・　試合で勝たせてあげられなかったという気持ちと、試合に出ることができなかった３年生に対して申し訳ないという気持ちです。

・　勝てるチームを作ることと野球の技術を上げる指導は異なるところがあると感じた。

・　部員不足で廃部の危機にあったが、よく乗り越えてくれて感無量です。

・　これまで見えなかった生徒たちの強い思いやプレーが見られ、成長した姿を感じた。一人ひとりが高校野球をやってよかったと、思ってもらえるような指導をこれからもやっていきたいと感じている。

・　選手たちが、しっかりと結果を受け止め、「人生の糧」にしてくれることを願っている。特にリザーブだった３年生の満喫感を重視している。

・　初戦敗退だったので、校歌を一緒に歌えずに残念でした。

・　やりきったという気持ちと、もっと生徒のためにやれたのではないかという気持ちが混在している状態です。

・　監督力が試合に直結するのが高校野球！負けたら後悔しかない。夏を勝ち抜くには心の部分をもっと鍛えないと勝てないと思う。

C　３年生に対してどのように接しましたか？（どのように語りかけたかなど）

・　さまざまな人の協力があって野球ができること、そのことに対して最後まで諦めることなく戦い抜くことが、自分たちにできる最大限の恩返しであるという話をしていた。

・　試合終了後には、なかなか言葉が出てきませんでした。これから、進路を決めていく必要があるので、受験で自分の目標を達成して欲しいという気持ちを話しました。

・　これからの人生の方が大切であること。これから先も野球に関わってほしいということを伝えました。

・　廃部の危機の際、監督をはじめ多くの先生方が裏で支援してくださったことを話しました。つらくなったら、人を頼れと話しました。。

・　卒業後も今の気持ちを忘れず、自信をもって生きてもらいたい。何事も頑張ることの大切さを忘れてもらいたくないし、高校野球の素晴らしさを次世代の子供たちに伝えてもらいたいと伝えた。

・　よく我慢して戦ってくれたこと。今回は負けたが、人生は道半ばであり、これからの人生で勝利者となってほしいと伝えた。

・　「努力をしても必ず報われるとは限らない。しかし、努力をしなければ決して何も生まれない」。今までの努力は、いつかどこかで、本人も意図しないところで必ず花を咲かせることを伝えた。また、帰宅したらまずは家族に「ありがとう」と感謝の言葉を伝える人であってほしいと話した。

・　少ない部員数でも厳しく指導する機会も多かったがフォローもしながら接してきた。

・　たった一人の３年生として大変なこともたくさんあったが、一生懸命に何事にも取り組んだお陰で、他の多くの部活動から手伝ってくれる選手が参加してくれるほどの「応援される部活動」になることができたのだと話した。

6　高校野球全般を通してあなたはどのような考えを持っていますか？

A　高校野球のあり方について（特待生、マスコミ、プロとの関わりなど）

・　ルール内であれば、特待生がいることは構わないと思う。また、高い志をもち、強いチーム、良い指導者を求めて、遠くから野球留学をする生徒たちも素晴らしいと思う。ただ、公立高校の教員としては、地元の学校に地元出身者が集まり、甲子園に出場し、地元の方々、OBやOGが心から応援する、そんな『おらが町のおらがチーム』を作っていきたいと思っている。

・　プロとの関わりについては、今後もっと緩和していけるとありがたいと思っている。やはり、部員にとってプロ野球選手は憧れの存在であり、プロ野球選手から直接アドバイスや指導を受ける機会があると、よりモチベーションのアップや、成長にもつながるのではないかと思う。

・　勝たなければ、納得しないというのが現実だと思っています。その中で、教育的な側面を疎かにせず、結果を出すにはどうすればいいかを考えて、指導しています。

・　特待生や選手獲得については、一部の学校に選手が集中し、その結果、部員不足の学校が多くなっていると思います。非常に難しい問題ですが、何か解決するための取り組みを考えていく必要もあると思います。

・　特待生、プロとの関わり方に関しては問題ないと感じるが、マスコミが高校生を必要以上に取り上げることに関しては違和感があり、けがをしながら試合に出場することを美徳としたり、勝利至上主義を促したりしかねないと感じており、スポーツ本来の目的から逸脱しているようにも感じる。

・　日本には必要なスポーツ。教育の一環であり、また、高校生の人格形成にもなっている。甲子園を狙えるチームや、甲子園常連校へ進学し、高いレベルでチャレンジすることは必要な考えだと思うが、高校野球人口が減少している原因の一つに、地域の高校へ進学し、中学校の仲間と一緒に頑張るというスタイルが無くなりつつあり、野球も中学で終わりという生徒が多いと感じる。

・　マスコミの取り上げが異常であり、もう少し考えて伝えてもらいたいと思う。特に敗戦後の、ミーティングの様子を映像で放送するのは違和感がある。そのようなミーティングなどは、メディアが入る空間ではないと思う。

・　私学における特待生は、その生徒の将来のことまでしっかりと考えて入学させてもらいたい。埋もれてしまい、３年間満足に高校野球ができず終わる生徒も多数いる。

・　学力と同じように運動能力で進路を開いていけることは大切なことである。しかし、勝利至上主義やチーム強化のための授業料免除や給付金など金銭的な条件での生徒募集は、保護者の偏った価値観や生徒の教育上の弊害を生むと考えている。

・　特待生の実態が分からない。せめて調査・公表し、今後どうしていくか議論すべきであると思う。

・　高校野球だけのことではありませんが、長崎県はプロ野球球団もないためか、野球と縁遠い子供が多いように感じます。もっとプロ選手と関わる機会があっても良いのではないかと思います。

B　高校野球の良い点、悪い点を考えて、どうあるべきだと思いますか？

・　トーナメントなので、出場選手が限られてきます。ＤＨやリーグ戦、またはリエントリーなど選手がたくさん出場できるルールや規定があると良いと思う。

・　夏の甲子園大会は都道府県の代表チームが戦う場なので、登録選手の中に、地元の都道府県選手が一定数いるべきだと思う。それが、地元の子どもたちへのいい影響と野球人口の維持につながると思う。

・　常にチャレンジ精神があれば甲子園という目標にも近づくことができると思う。また、この甲子園への道が絶たれたとしても得られる財産があると思う。

・　高い精神性を求めることは意義があるが、大会運営方針や制限的ルールによって、生徒に大人の論理で目標を押し付けている部分が多いと思う。

・　リエントリー制やＤＨ制の採用など、もっと柔軟にルールの改正や試行に取組み、「野球人口の拡大」につなげてほしい。

・　試合では、スピードアップと言われて野球本来の姿を忘れている。駆け引きが野球の醍醐味である（駆け引きには時間がかかる）と思う。

・　学校内でも教員、生徒が活躍し、応援されるチームを目指すべきだと思います。

・　高校野球は教育の一環で、教育の場を野球場に移したものであり、学校内では学べないことを学ぶ場であると思う。

7　今年の選手権大会への要望などありましたら書いて下さい。

・　甲子園に出場できた指導者、選手の考え方をたくさん知りたいです。

・　ストライクゾーンを審判協会と指導者側で再確認する必要があると思います。

多数のご意見・要望等ありがとうございました。
その他のアンケート内容については、県高野連理事長より
研修会及び部長会で説明する予定です。

あとがき

夏の大会が終わると、指導者は,毎年この一年間の反省や新チームへの期待が湧いて来るものです。今年もコロナ禍の中での大会を迎えることになりました。日々の練習や練習試合の制約を受ける中、たいへんなご苦労があったことと思います。それぞれの指導者はいろいろな思いをもち、毎日の指導に情熱を傾け、生徒の成長を見守って来られたと思います。その思いを多くの高校野球ファンに届けたいと、「2021夏の終わりに」を企画しました。多くの方々に執筆していただき、感謝します。高校野球アンケートにつきましては、たくさんのご意見をいただきありがとうございました。紙面の都合上、同じような回答をまとめたり、長い文章は一部割愛しました。先生方のご意見が十分に伝わりにくい面もあるとは思いますが，ご了承下さい。また、文中の写真は、朝日新聞社、長崎新聞社に提供していただきました。ご協力に感謝いたします。

初めての企画でいろいろ不手際があり、ご迷惑をおかけしました。皆さまのご協力で、一歩前に踏み出すことが出来たように思います。また多くの文章から指導者の日々の思いや葛藤、苦労がうかがい知ることが出来ます。そして本来の「高校野球の心」がにじみ出ていると感じます。この冊子が高校野球の発展に少しでも寄与できれば、私たち顧問会としては幸いです。

次号は「2022夏の終わりに『高校野球を支える人たちの思い』」を予定しております。また次回もご協力よろしくお願いします。

令和３年１０月

長崎県高等学校野球連盟　顧問　北島　弘道

2021夏の終わりに　『監督たちの思い』

発　　行　　2021年10月20日
企画・編集　　長崎県高等学校野球連盟　顧問会
千綿　勝彦　　藤武　　透　　角西　政信
嶋田　佳行　　北島　弘道
協　　力　　長崎県高等学校野球連盟
朝日新聞社・長崎新聞社